

2	一宮	宮西小学校	オゼキ チカ ----- 氏名 尾関 千佳
分科会番号	特	分科会名	「特別の教科 道徳」特別分科会

研究題目

「探究」と「対話」を重視した道徳教育の創造

～多面的・多角的な思考を促し、「考え、議論する道徳」の具現化
を目指して～

1 はじめに

近年の社会はどんどん複雑化している。1つの学級の中にも様々な国籍、家庭環境の児童が在籍しており、価値観は多様化している。多様化社会へと変革されていく現代を生きていくためには、児童が自身のことを振り返りながら自分の意見を持ち、その意見を他者と交流しながら多様な価値観に触れる場が必要だと考える。しかし、自分の考えを表現したり、伝えたりする力には個人差がある。そこで、全ての児童が自分の意見を持ち、交流しながら道徳的価値の理解を深めることができる、『多面的・多角的な思考を促し、「考え、議論する道徳」の具現化』を目指して研究・実践を行った。

2 主題設定の理由

本研究は2023年の1年生で実践した。学級の児童は素直で、何事にも一生懸命に取り組む様子が多くみられる。しかし、素直で純粋だからこそ、褒められることがよいことで、注意されることは悪いことだと安直に捉えている。そのため道徳の授業では意見に偏りが出やすく、自分の意見が少数派のときはなかなか発言することができない児童が多い。

また、学級内の言語能力の差が大きい。自分の考えを言語化することが難しいため、思うことはあってもそれをうまく人に伝えられず、ぼんやり人の発表を聞くだけになってしまう。そこで、手立てをもとに、どの児童も考えを言語化したり図に表したりし、授業に参加している充実感を感じながら意見を交流できるようにしたい。学力差や能力差に関係なく、全ての児童が「探究」と「対話」ができるよう、ユニバーサルデザインを取り入れた道徳の授業を目指して実践を行った。

3 研究の仮説

道徳の授業において、気持ちの表し方や、話し合いの仕方を工夫すれば、児童は自分の考えをもち、他の考えを理解しながら、多角的・多面的に思考することができるようになるだろう。

4 研究の手立て

(1) 気持ちの表し方

ア ハートメーターの使用

「にこにこな気持ち」をピンク色、「しょんぼりな気持ち」を水色で表すことができる思考ツールとして、教具の「ハートメーター」を使用する。言語化ができなくても、色の割合で気持ちを表すことで、自分の考えたことや思ったことをアウトプットしやすくする。ハートメーターを頭の上に掲げ、児童同士でハートメーターをお互いに見合うことで、意見交流を促す。また、ピンク色、水色は具体的にどんな気持ちなのかを問い、自分の考えを言語化しやすくする。

イ 役割演技

教師と会話形式の役割演技をすることで、登場人物の気持ちを理解しやすくする。ワークシートに記入したことのみを発言させるのではなく、役割演技の中で教師がさらに質問をし、自分の考えたことや思ったことをアウトプットしやすくする。

(2) 話し合いのしかた

ア うろうろトークタイムの設定

立ち歩きながら自分の考えを伝え、相手の考えを聞く活動として「うろうろトークタイム」を取り入れる。うろうろトークタイムの活動時には、後述する「反応言葉」と「聞き方・反応名人の術」を意識させることで、相手の意見に対して肯定または質問の形で自分の意見を伝えられるようにする。

イ 聞き方・反応名人の術の提示

授業の初めに「聞き方・反応名人の術」を提示し、児童が自分で意識することを決める。うろうろトークタイムや全体発表で話を聞く際に、なんとなく話を聞くのではなく、自分で決めた聞き方・反応名人の術を意識して話が聞けるようにする。聞き方・反応名人の術は「㊦相手におへそを向けて聞く」「㊧最後まで聞く」「㊨うなづきながら聞く」「㊩反応言葉を言いながら聞く」「㊪相手に質問をする」の5つで、後半につれて難易度が高くなっている。それぞれの児童が自分のレベルに合った目標を設定できるようにする。

ウ 反応言葉の提示

「あ〜」「いいね」「うんうん」など、話し合い活動の中で反応する言葉の例を提示する。話し合い活動の前に全員で反応言葉を確認することで相手の意見に対して必ず反応を返すようにする。

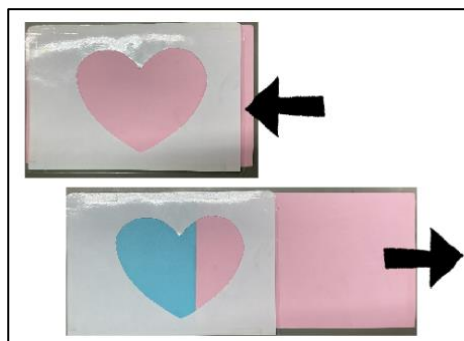
5 研究の実践と考察

(1) 気持ちの表し方に関する手立て

検証実践 I：教材「なわとびカード」内容項目 A (2) 正直、誠実

本教材は、現在なわとびに挑戦している「わたし」が、後ろとびを失敗してしまい、うそをついて合格したくなる気持ち乗り越えて、正直にもう一度なわとびに挑戦するという内容である。

うそをつきたくなる「わたし」の気持ちと、正直にもう一度挑戦するときの「わたし」の気持ちをそれぞれ「ハートメーター」で表現させた。A5サイズのハートメーターを1人1個持ち、ワークシートに記入する前にハートメーターで気持ちを表現した。まだ字を書くことに時間がかかる児童や、自分の考えを言語化することが難しい児童も、気持ちをピンク色、水色の2色にすることで、自分の考えを表すことができた。また、ハートメーターを頭の上に掲げた状態で見せ合う活動をする中で、自分と似ている考



資料 1 ハートメーター

えや異なる考えを視覚的に知り、その後お互いのハートメーターを見せながら意見を交流をした。教師が「このピンク色はどんな気持ち？」「少しだけ水色が残っているけど、どうしてだろう」など色に触れながら発問することで、自分の考えを言語化しやすくなっていた。うそはいけないことだという規範意識のみで考える児童も複数人いたが、うそをついたときのハートメーターはにこにこな気持ち（ピンク色）としょんぼりな気持ち（水色）が半分ずつになり、うそはいけないけれど合格をしたい気持ちや少しくらいいいかという弱い気持ち、人間には弱い部分があるという考えにも触れることができた。

また、ハートメーターを黒板に掲示することで、「わたし」の気持ちに変化していることが視覚的に分かりやすくなった。合格できなかったが、にこにこの気持ち（ピンク色）が増えていることに注目させることで、合格できなくても、正直でいることによりモヤモヤせずスッキリした晴れやかな気持ちになっていることに気づくことができた。



資料 2 ハートメーターを掲示した板書

役割演技では、お面をつけて役になりきることで、ワークシートの記述にない意見を発表する児童もあり、児童の本音に迫ることができた。正直に話したわたしの理由として「だって本当に合格しないとシールがもらえない」と発言した児童に対して教師が「でも跳べなくてもおまけで合格にしてあげるから、シールをあげるよ。合格でいいよ」とさらに会話を続けた。それに対し児童は「でも、がんばって練習して本当に跳べるようにならないと成長できないから」と答え、本音に迫った意見を発言することができた。役割演技の後にハートメーターを組み合わせながら気持ちを問うことで、「正直に言うとドキドキにさようならできる」「正直に言うとみんなレベルアップできる」と、正直のよさについて考えを深めることができた。

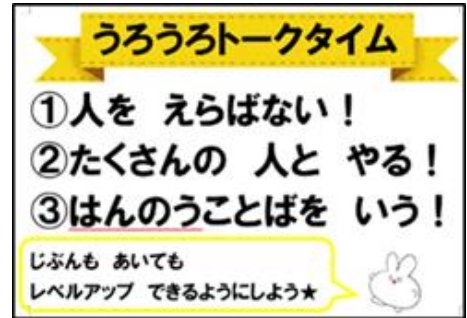
また、会話形式のやりとりをすることで、文字に起こせなかった考えも言葉にしやすくなったと考える。文字だけではイメージをもちにくい児童も、実際のやりとりを見せることでイメージが膨らみやすくなった。

(2) 話し合いのしかたの工夫に関する手立て

検証実践Ⅱ：教材「きゅうしょくとうばん」内容項目C 勤労、公共の精神

本教材は、給食当番活動の中で小さいおかずの仕事をする「ぼく」が、初めはなかなか上手く配膳できずみんなを待たせてしまうが、くり返し取り組むことを通して上手に配膳することができるようになり、みんなが喜んでくれるという内容である。

席を離れてうろうろしながら交流をする「うろうろトークタイム」は、どちらが先に話すかはじゃんけんで決めたので、楽しみながら取り組んでいる様子が見られた。「①人を選ばない」「②たくさんの人とやる」「③反応言葉を言う」の3つの約束を提示し、継続して取り組んだ。「僕もそう思う。一緒だね」と共感的に話を聞く児童もいれば、「自分とは違う。私はこう思う」と相手との違いに気づく児童もいた。自分以外の意見を聞く場を設けることで、多様な考えを知ることができた。



資料3 うろうろトークタイムの約束

児童Aは、上手に配膳できるようになったぼくの気持ちについて、初めはワークシートに「がんばったからほめられた」と書いたが、うろうろトークタイム後に「いっぱいやるとうまくなるからつぎもがんばろう」と書き足していた。友達の意見を聞くことで、他者の役に立つことは褒められるのでよいことだという表面的な理解ではなく、自分の成長にもつながることだと気づくことができた。うろうろトークタイム後の全体発表では初めの自分の意見に付け足して意見を発表することができた。

資料4 児童Aのワークシート

また、ワークシートの記入が終わった児童から話し合いに移り、書くことに時間が必要な児童には書く時間を長く取り、自分の考えがまとまってから話し合いに参加した。全体発表や班ごとの決まった時間での話し合いでは、まだワークシートへの記入が終わっていない児童や考えがまとまっていない児童が活動に参加することが難しく、全員が書き終わるのを待つと早く書けた児童には待ち時間が発生してしまう。ワークシートに記入が終わった児童から話し合いに移ることで、どの進度の児童も常に活動することができた。

聞き方・反応名人の術は道徳の授業開始時に毎回確認をし、話の聞き方を定着させることができた。それぞれのレベルに応じた目標を設定することで、多くの児童がよりよい話の聞き方ができたという達成感を感じながら取り組むことができた。

反応言葉は1年間教室掲示をした。授業の中で良い反応をした児童を褒め、その際出た反応言葉を書き足しながら掲示物を作った。相手の意見にどう反応したらよいか分からなかった児童も、掲示を見ながら反応言葉を言うことができるようになっていった。相手がよい聞き方をしてくれること、反応が返ってくることにより、うろうろトークタイムでの話し合い活動も活発になり、どの児童も話しやすい雰囲気作りをすることができた。



資料 5 反応言葉の掲示

6 研究の成果と今後の課題

今回の研究で行った気持ちの表し方の工夫と話し合いのしかたの工夫は、児童が自分の考えをもち、他の考えを理解しながら、多角的・多面的に思考することによって有効だったと考える。発問に対してのアウトプットのしかたを多種用意することで、どの児童も考えを言語化したり図に表したりすることができた。話し合いの経験が少ない児童は、真似すべき基本形を知ることによって話し合いに積極的に参加することができるようになった。

しかし、意見を表現することと話し合うことに時間をかけてしまい、深める時間が不足してしまうことがあった。意見を交流して終わるのではなく、多様な意見の類似性や違いに注目し、そこから全体でさらに考える時間をしっかり取れるようにしたい。

7 終わりに

本研究を通して多面的・多角的な思考を促し、「考え、議論する道徳」の具現化を目指し、研究を重ねてきた。道徳の授業の中で、児童は自分と類似した意見があること、自分と異なる意見があることを知ることによって価値観は多様なものだと理解することができた。多様な価値観があるからこそ、みんなでより良く生きていくためにどうしたらよいのか考え、道徳的価値の理解を深めることができた。国籍や家庭環境など、児童をとりまく背景は画一的なものではない。だからこそ、多様な意見が生まれる。今後も道徳の授業が全ての児童にとって、自分の意見をもち、交流することができる場になるよう研究を続けていきたい。